

建築家・中原暢子の生涯における主要な作品と設計思想に関する研究

A Study on the Major Works and Design Ideas of Architect Nobuko Nakahara
During her Life Span

深石 圭子

論文要旨

本研究の目的は、茶人であり建築家でもある中原暢子（1929-2008 以下、「中原」という）の作品とその背景となる設計に対する考え方が、どのように変化し確立されたのかを明らかにすることである。中原は、草創期の女性建築家の一人として取り上げられることがあるが、建築家・中原を単独で研究したものはこれまでにない。モダニズム建築家のひとりである池辺陽（1920-1979 以下、「池辺」という）から指導を受けた中原が、どのような過程を経て、伝統的和風住宅や茶室、その「写し」を設計することになったかを生涯における主要作品を遡ることによって、その設計思想の変遷を明らかにした。

各章のまとめ及び総括は下記の通りである。

第1章 序論

本論文の目的は、中原の作品とそれを支えた設計思想の変遷を明らかにすることである。中原の雑誌等への建築掲載作品は、少なくこれによってその過程を把握することは極めて困難であった。しかし、幸運にも中原が林・山田・中原設計同人（以下、「設計同人」という）時代に設計した大部分の設計図書が元所員に託され、中原の母校である東京家政学院大学に寄贈されたことで分析を行うことができた。

中原は、東京家政専門学校で住居概論の講義を分離派建築会の石本喜久治から受けたことをきっかけに建築を志した。武蔵工業大学短期大学部に入学し、蔵田周忠や笹原貞彦から建築教育を受け、1952年東京大学生産技術研究所池辺研究室に入室した。「住宅 No.20」「住宅 No.28」等の設計を担当し、池辺著の『すまい』（1954）の出版、伝統論争（1955・1956）及び五期会運動（1956）による同僚の研究室からの独立し連合設計社を設立（1957）等が身近な環境にあった。その後、1958年に同研究室を辞し、林雅子・山田初江と共に設計同人を設立した。以来事務所の閉鎖（2001）まで住宅を中心とした144以上の作品を設計した。そのうち設計年の明らかな作品を時系列に4期に分けてその特徴と展開を明らかにする。

第2章 HP シェルを用いた構造表現主義―「長覚院」―

門型ラーメンに切断 HP シェルを載せた「長覚院」を取り上げ、その建設過程と設計思想を明らかにした。設計は池辺が伝統論争の中で展開した「伝統」に対する考え方と「建築創

造」について3つのポイントを忠実に守って実現したものである。第1の「機能主義を正統に戻す」については、寺院であることと村あずかりの寺として村の集会や寺子屋としても使われてきた伝統を踏まえて、HPシェルと九輪塔を始めとするシンボルを用いて尊厳のある宗教施設を目指すとともに、アコーディオンドアを内陣と外陣の間に設置し、気軽に集会などに利用できる村に解放されたデザインとした。第2の「技術主義への徹底と非人間性の克服」では、池辺や元同僚が円筒シェルを設計に採用している中で、池辺研究室時代の構造設計者からの支持を受け、最先端のHPシェルをV型断面の門形ラーメンで支え、その軒先を切断することで「柔らかさ」を表現した寺院とした。第3の「建築を大衆に結びつける」では、住職や檀家の意向を積極的に受け入れ、屋根形状の変更や石経埋納などを通して寺院建築への参加を促した。

第3章 木造を主構造とする構造表現主義―「辻別邸」―

「辻別邸」は木造を主構造とする構造表現主義的作品である。丸太柱と合せ梁でトラスを構成し、その間に床・屋根を差し込み、1階をピロティとした別荘建築である。これ以前に建設されたA.レーモンド設計の「延岡ルーテル教会」(1957)や林雅子設計の「草崎クラブ」(1961)、「末広がりの家」(1963)は、同様に斜材丸太を採用しているが、「辻別邸」は、全体をピロティとしており、他の作品との差別化を図っている。デザインは構造表現主義的建築であるが、構造システムと建築表現の完全な一致にこだわることなく、荷重の大きい2階床を構造上丸太トラスから分離することによって丸太トラスの負担を減少させ、さらにブロック壁を導入することによって地震力に対応するとともに、ピロティの有効利用を図るなど柔軟な設計態度がみられる。

第4章 農村住宅に関する言説と作品

農林中央金庫組合金融推進部の中に大高正人や山名元を中心に農協建築研究会(NKK)が設立され農協を中心としたまちづくり、農協施設の建設及び住宅相談事業を行った。設計同人はこの住宅相談事業に参加し、中原は都市近郊農村意識実態調査から農村住宅の問題点を整理し、高度成長期の大都市近郊の新築農家住宅10軒(1966-1971)を設計した。これらの設計は第Ⅱ期にあたる。間取りについてはプライバシーの確保やDKスタイルの採用等一程度の近代化を達成したが、日常生活と農作業の切り離しには至らず、土間空間を設け下足で家事、食事を可能としている。DKを上足とする場合でも、別に土間食堂を確保し下足での昼食を可能とした。

民法改正や農地解放で農村に構造的変化をもたらしたとはいえ、依然として残る「人寄せ」のための空間として「続き間」とその農家の格を示すため、本格的な「座敷飾り」が求められ、全ての住宅に「続き間座敷」や「単独座敷」を設ける結果となった。様式選択を行わない「機能主義」の原則から逸脱しているが、中原は不本意ながら「続き間座敷」の様式選択を行ったと考える。

第5章 様式併存の受容―「水野レストラン」―

「水野レストラン」は、明治建築風、蔵造り、書院造の3種の建築様式を併存した商業建築であり、これは池辺の「機能主義」から逸脱を示す設計方法、設計思想である。この期の設計思想の転換について考察した。

これについて中原が自ら語った資料はない。建築主の水野蔵左衛門（幸夫）は、工業デザイナーからレストラン経営に転身した日本文化に造詣の深い趣味人であり、その弟はファッションデザイナーの水野正夫で日本とパリに店舗を持ち、日本文化についての著書もある文化人である。これ以前に中原の設計に書院造風のインテリアデザインはあるが、様式を前面に押し出したり、様式を併存させたりするデザインはみられない。また、この作品を建築雑誌に公表していないことから、中原からの提案ではなく建築主の強い要望によるものと推察される。「食事を楽しむ」ための舞台装置として、料理に始まり、器や調度品、建築から環境に至るまで、総合的に目配りをする建築主の考え方に共鳴したのではないかと考えられる。

第6章 「和風」と「機能主義」の展開

和風住宅の設計が集中する第Ⅲ期を中心にその特徴を検討した。農村住宅の設計でみせた「続き間座敷」のある和風住宅の設計において、和風住宅を設計できる建築家との評判が広がったのであろうか、第Ⅲ期には和風住宅の依頼が集中し、全ての住宅に座敷のある「和風」住宅が設計された。

それでは中原が池辺から学んだ「機能主義」は消失したかということ、そうではなく、生活部分の機能的な設計や構造・構法・材料の合理的で経済的な選択等、設計の基盤には池辺から学んだ「機能主義」が持続していることが確認された。

一方、中原はこの時期から茶道を学び直す。「続き間座敷」に対する強い要望を深く見直すために「おもてなし」をその中心におく茶道を学び直したのではないか。身近な叔母や東京家政専門学校から茶道を学び、池辺研究室で設計した初めての住宅も茶室であった中原にとって、茶道を拠り所とすることは必然的なことであったかもしれない。

第7章 茶室設計の展開

池辺研究室での初めての設計で茶室のある住宅を担当した中原は、独立後に設計した住宅に付属する茶室25室と独立した茶室1軒を設計した。これをまとめ、各時代での特徴を明確にし、さらに「写し」と考えられる茶室を抽出し、本歌と比較することで、その考え方を考察した。

第Ⅰ期は、これまでの茶室の様式にこだわらない新しい茶室であった。第Ⅱ期・第Ⅲ期に新築茶室はみられない。第Ⅳ期は、茶道や懐石料理の教室が開催できる複数の茶室、厨房（台所）を構えるものが多くを占め、本格的な二重露地のある外部空間も計画されている。

広間については、その流派の基本となる茶室を写している。しかし、細部をみると大胆な設計変更もみられる。自邸では、勾配天井や内部空間に露出した合せ梁を採用するなど、こ

れまでの設計で試みてきた中原好みのようなものがみられる。また設備類を茶室室内から直接みえないところに建築的な装置をつくり収めており、茶事の進行に伴って、明るさの調整を機械的操作で可能とする細かな配慮がなされている。小間については、基本的には、本歌を忠実に再現しようと試みている。自邸の暢庵では、「実際その茶室を訪れてみると、極めて質が高いため、その「写し」に取り組むことを考えた」と述べており、茶道の基本である「おもてなし」をスムーズに行い、また、快適に使うために、茶室全体のプランニング、明るさや温熱環境の調整等、池辺から学んだ合理的な考えにより茶室を支えている。

総括

中原の設計思想がどのように形成されてきたかを考えると、池辺研究室での設計活動を通して学んだものが最も大きい。一つは池辺著の『すまい』（1954）に記されている住居を「生活機能」「空間機能」「構成機能」及び「視覚機能」に分類する「機能主義」である。他の一つは、伝統論争の中で学んだ池辺の伝統に対する考え方である。「伝統へのよりかかりは、かつての西欧のネオ・クラシズムのひからびた建築の二の舞を演ずる」と様式の選択を厳しく否定した。

このように、池辺研究室から学んだ「機能主義」と伝統の考え方を基盤として、その時々偶然の出会い、つまり、「長覚院」での住職や檀家との出会い、農村住宅における農家の人々との出会い、「水野レストラン」における経営者との出会い、茶道への接近と茶道の宗匠や茶懐石の料理人との出会いの度に設計思想や設計方法を見直し、「機能主義」の設計思想を超えて、様式の選択を受容した「中原流の機能主義」を構築したと考えられる。

付録

- 付録 1 中原暢子設計原図リスト
- 付録 2 中原暢子著作リスト
- 付録 3 中原暢子設計新築住宅の平面図・立面図一覧
- 付録 4 中原暢子略年譜

以上

建築家・中原暢子の生涯における主要な作品と設計思想に関する研究

—目次—

第1章 序論	8
1.1 研究の背景	8
1.2 既往の研究	8
1.2.1 中原に関する既往研究	8
1.2.2 草創期の女性建築家に関する既往研究	9
1.2.3 女性建築家グループ「林・山田・中原設計同人」	11
1.2.4 筆者の既発表論文等	11
1.3 本研究の目的と方法	12
1.3.1 目的	12
1.3.2 方法	12
1.3.2.1 発表作品からみる流れの把握	12
1.3.2.2 未発表作品を加えた時代区分の設定	13
1.3.3 研究対象の抽出	13
1.3.3.1 発表作品からみる作品の傾向	14
1.3.3.2 未発表作品を含めた作品の傾向	22
1.3.3.3 未発表作品を含めた研究対象の設定	25
1.3.4 機能主義と和風	27
1.3.4.1 機能主義の系統 構造表現主義	27
1.3.4.2 和風 様式の受容	29
1.3.5 本論文で使用する用語の定義	29
1.4 論文の構成	32
1.5 中原暢子の経歴	34
1.5.1 誕生から東京家政専門学校卒業まで	35
1.5.2 労働省入省から東京大学生産技術研究所池辺研究室退所まで	37
1.5.3 林・山田・中原設計同人設立から第1回 UIFA 参加まで	44
1.5.4 農協建築研究会設立から死去まで	45
1.6 第1章のまとめ	46
参考文献リスト	46
図版リスト	48
注釈	50

第2章 HP シェルを用いた構造表現主義—「長覚院」—	54
2.1 「長覚院」と第2章の概要	54
2.1.1 本章の研究の背景	54
2.1.2 本章の目的と分析方法	55
2.2 当時の新しい建築技術（HP シェル構造）	55
2.2.1 国内におけるシェル構造に関する初期の研究とシェル構造作品 ..	55
2.2.2 1950年頃の海外におけるシェル構造の動向	60
2.3 池辺の伝統に対する考え方と中原の設計方法	60
2.4 「長覚院」の設計	62
2.4.1 「長覚院」の「伝統」をたどり「寺」の機能を検討	62
2.4.2 技術主義の非人間性の克服	64
2.4.3 「長覚院」を大衆に結び付ける	69
2.5 考察	72
2.6 第2章のまとめ	73
参考文献リスト	73
図版リスト	74
注釈	76
第3章 木造を主構造とする構造表現主義—「辻別邸」—	80
3.1 「辻別邸」と第3章の概要	80
3.1.1 本章の研究の背景	80
3.1.2 本章の目的と分析方法	81
3.2 概要	81
3.2.1 平面構成の概要	82
3.2.2 架構の特徴 丸太柱・合せ梁・水平押え梁	83
3.2.3 丸太柱の構造	85
3.2.4 2階床の構造	87
3.2.5 大屋根と3・4階床	90
3.3 増改築での変更点	91
3.4 分析	91
3.4.1 丸太柱の利用	92
3.4.2 ピロティの実現と採用の背景	92
3.4.3 外観及び内観の意匠 地域性と中原の和風好み	93
3.5 考察	94
3.5.1 中原の丸太架構の空間構成の特徴	94
3.5.2 架構構成における現実的な対応	94
3.5.3 民家構造への親和性	95

3.6 第3章のまとめ	95
参考文献リスト	96
図版リスト	96
注釈	97
第4章 農村住宅に関する言説と作品	100
4.1 第4章の概要	100
4.1.1 本章の研究の背景	100
4.1.2 本章の目的と分析方法	100
4.2 農協建築研究会発足	100
4.2.1 農協建築研究会と林・山田・中原設計同人	101
4.2.2 柿生農協と農協建築研究会	102
4.2.3 農協建築研究会住宅相談事業	102
4.2.4 農協建築研究会の農村住宅研究	103
4.3 中原暢子設計の農村住宅	104
4.3.1 中原暢子の農村住宅に関する言説	105
4.3.1.1 雑誌『室内』掲載の「農村住宅の問題点」	105
4.3.1.2 書籍『農村の住まい』掲載の「住まいの要点」	106
4.3.1.3 農村住宅に関する言説	111
4.3.2 中原暢子の農村住宅に関する言説と作品の比較	111
4.3.3 林雅子と山田初江の農村住宅	119
4.4 第4章のまとめ	123
参考文献リスト	124
図版リスト	125
注釈	126
第5章 様式併存の受容—「水野レストラン」—	130
5.1 「水野レストラン」と第5章の概要	130
5.1.1 本章の研究の背景	130
5.1.2 本章の目的と分析方法	132
5.2 建築主等の経歴と敷地周辺の時代背景	132
5.3 立面計画	134
5.4 平面・断面計画	137
5.5 インテリア計画	142
5.6 考察	147
5.6.1 目白台の歴史的・文化的環境	148
5.6.2 明治時代の上流層の住宅形式「和洋館並列型住宅様式」	148

5.6.3	文化人の居住地「目白台アパート」	148
5.6.4	環境に適したレストランの構想.....	149
5.6.5	中原暢子の「水野レストラン」でのデザイン	151
	参考文献リスト	151
	図版リスト.....	151
	注釈	153
第6章	「和風」と「機能主義」の展開	156
6.1	第6章の概要.....	156
6.1.1	本章の研究の背景	156
6.1.2	本章の目的と分析方法	156
6.2	「和風」と「機能主義」に関する語句の定義.....	158
6.2.1	「和風」に関する語句の定義	158
6.2.2	中原暢子と浜口ミホの「床の間追放論」	160
6.2.3	「機能主義」に関する語句の定義.....	161
6.3	中原暢子設計の「和風」住宅の特徴	161
6.3.1	第Ⅲ期の「和風」住宅の接客空間	163
6.3.1.1	中原暢子設計の「本格的続き間座敷」	163
6.3.1.2	中原暢子設計の「続き間座敷」	171
6.3.1.3	中原暢子設計の「単独座敷」	172
6.4	中原暢子設計の住宅に関する分析	175
6.4.1	「和風」の流れ	175
6.4.2	内部空間における和室の設え	176
6.4.3	外観における「和風」要素	180
6.4.4	LDKの特徴.....	184
6.4.5	茶の間と和室の居間	185
6.4.6	構造種別による分類と傾向.....	186
6.4.7	混構造による分類と傾向	187
6.4.7.1	混構造の形式による分類と作品例	187
6.4.7.2	混構造作品における構造の表出の傾向	191
6.5	考察	192
	参考文献リスト	193
	図版リスト.....	193
	注釈	195
第7章	茶室設計の展開	196
7.1	第7章の概要.....	196

7.1.1	本章の研究の背景	196
7.1.2	本章の目的と分析方法	200
7.2	中原暢子設計の茶室における時代別特徴.....	203
7.2.1	初期の近代的な茶室設計	203
7.2.2	本格的な茶室設計とプロデュース	208
7.3	広間における本歌の写しとみられる作品.....	215
7.3.1	中床四畳半切の茶室	216
7.3.2	床回りにおける特徴	216
7.3.3	断面における特徴	219
7.4	小間における本歌の写しとみられる作品.....	221
7.4.1	「森邸」茶室 3 畳台目	222
7.4.2	自邸「茶室のある家」茶室 2 畳台目	228
7.4.3	「大野邸茶室」茶室 3 畳台目	238
7.5	考察.....	244
	参考文献リスト.....	245
	図版リスト	247
	注釈.....	249
第 8 章	各章の要約と総括	252
8.1	各章の要約.....	252
8.2	総括.....	255
8.3	今後の課題.....	255
	図版リスト	255
謝辞		256
付録		258
付録 1	中原暢子設計原図リスト	260
付録 2	中原暢子著作リスト	267
付録 3	中原暢子設計新築住宅の平面図・立面図一覧.....	274
付録 4	中原暢子略年譜.....	310